



けせいの巻三味線
 白之巻
打止り巻の巻

遠 13
 1997
 5止



1737
5

けいせい色三味線

目録 漆之巻

才一 室の控女よきどりま浮

女郎のうらませうふふ一
産みかどりまあわつて
延助 指よあうどんの

才二 焼えよる鶴野の仕掛

此を八何りあふ命責
際もうさふもよ方の致
かろりの八座一いつ持る
女郎

海老名三味線

才三 稲荷町は化け頭を食後男

上方より下りの国の女は云
わづらひしとて八段長新巻
目角乃強と小倉の
大長

高 稲子角ぞぬ丸山の口舌

長勝と好家と自衛よ
りり無意よとくわの
つよと朝鮮人多気乃
茶の男

播磨宝津女房の名を

▲あつちの市かん也

▲天神 くらゐの一本林おごもり

▲一日 井ばら一日のりは

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲みちや清田月

▲天神 くらゐせん

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲一日 くらゐのくらゐのくらゐ

▲ひあぢちのつと

▲ 寄寄町 寄寄町

一 変 三つもの 一 変 萩野 一 変 湯野

一 日 みやぎの 二 日 三 日 所

一 森 わぶさう 一 森 ていり 一 森 夕ざり

▲ 同町 七とる内 一 変 中ぎん

一 変 湯たん 一 変 小がら 一 変 あり山

▲ 同町 引田屋内 一 変 せん山

一 変 うまゑ 一 変 ひら山 一 変 宮尾

一 日 三つもの 一 日 うんも 一 日 いさく

一 森 もろも 一 森 もろが 一 森 わぶさう

▲ 同町 肥後屋内

一 変 くらん 一 変 こねさ 一 変 山ざん

▲ 同町 高木屋内

一 変 わぶさう 一 変 魚わら 一 変 うりり

一 日 大せん 一 森 三つもの

▲ 同町 大坂屋内 一 変 山 一 変

一 変 高きん 一 変 あうきん 一 変 わせん

▲ 同町 せんがや内 一 変 高きん

一 変 うさう 一 変 せんきん 一 変 せんきん

一 日 せんきん 一 日 あらき 一 日 子きん

▲ 同町 ちりご内 一 変 正らり

一 変 大ちり 一 変 せんきん 一 変 あらき

一 日 聖風 一 日 出解 一 森 せんきん

一 森 くらん 一 森 小きん 一 森 一かく

▲ わげやの分 一 七つりや安をきん

一 変 高きん 一 変 せんきん 一 変 やんきん

一 変 くらん 一 変 せんきん 一 変 せんきん

一 本 屋 半七 一 変 同坂屋内 一 変 せんきん

一 変 六十三 一 変 せんきん

一 変 十六 一 変 せんきん

一 変 七十九 一 変 せんきん

一 変 七十九 一 変 せんきん

一 変 七十九 一 変 せんきん

は介藩くま

一徳後のこもよわの七町

一安藝の文治は六坂町

右式左和女郎位付

下の園と日ありあり

一筑紫の徳多よ柳町

は和の女郎 徳とつて

わつまの ぬけい

そ介の程重る好色女

の畧者

い

一室の極女は氣とらたま家

花あは蝶まの紙の紋和

押光揚列室のめ和あ平林職者

はあ子あり極も和の徳系と或平室

極女町と同高貴を座の九いあ二見

中さの程よびな入る地の方屋と意の

るま浮室は漆の死身牙は里極女も

ひつとままりて風春もまのいひを極

矢坂の女弟左の風とまのいひを極

一座も秀やくふらもりもあつておつ

は左の流もあつてくさる花風呂下子風呂

廣崎風呂は香交揚屋をりふは神馬の

かり子も神馬の松交とあつてあまの

あまの末社ともあつて極も柳

風呂よあつてあまの極もあまの

見たりさうきもちぶひりさかりめえ始
てのをありまおきと我もこの後の事を
さすのを極すまのつしつらかの後とがさう
先んまののあり極すのつしつらかの後
りさうゆふ気味のさののつしつらかの
大臣さうさしふにしてのつしつらかの
るやうなつしつらかのつしつらかの
有徳の二男三女をさすつしつらかの
は大臣十七年を代元佐とてし里に
風依り世流りてさうも南のつしつら
るゝ我はさうさうのつしつらかの
廣徳風長はあま我もさうのつしつら
るめてのつしつらかのつしつらかの
かりし和合さうのつしつらかの
九のつしつらかのつしつらかの

あつては極紙のつしつらかのつしつら
とさうのつしつらかのつしつらかの
別も極紙のつしつらかのつしつらかの
らりつらかのつしつらかのつしつらかの
と別紙のつしつらかのつしつらかの
ありつらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの
つらかのつしつらかのつしつらかの

海島記 五十七卷 東



及び此れ此のひともおいてさういふ
 毒の正に毒者種と九くくあらぬの毒を
 毒守の大方にて毒の正に毒者種と九くく
 毒者種と九くくあらぬの毒を毒守の
 毒守の大方にて毒の正に毒者種と九くく
 うどの末社とありお下り脈わらぬ
 うどの末社とありお下り脈わらぬ
 うどの末社とありお下り脈わらぬ
 うどの末社とありお下り脈わらぬ
 うどの末社とありお下り脈わらぬ

非流むれは獲りおつくと毒しともなく
 毒業小業このつとも川いごらん経も
 あげられぬ毒をせうせうと拍子腰
 うらむく毒をせうせうと拍子腰
 うらむく毒をせうせうと拍子腰
 うらむく毒をせうせうと拍子腰
 うらむく毒をせうせうと拍子腰
 うらむく毒をせうせうと拍子腰
 うらむく毒をせうせうと拍子腰

かく入るは法御りならんといふてあつても
 是のまゝのまゝと申すは極自傍り
 今にさういふ事と申すはのほかにさういふ事
 りてかたの末社にまゝにまゝにまゝに
 此後まゝといふ事と申すは子の内あり相も
 おりぬれさういふ事と申すはのほかにさういふ事
 ありさういふ事と申すはのほかにさういふ事
 きて此の事と申すはのほかにさういふ事
 と申すはのほかにさういふ事と申すはのほかに
 百ふつとも是を推考といふ事と申すは
 不月傍りといふ事と申すはのほかにさういふ事
 きて推考といふ事と申すはのほかにさういふ事
 して名揚といふ事と申すはのほかにさういふ事
 月仲たさの事と申すはのほかにさういふ事

六脈をわきまをきつらうといふ事と申すは
 あり自傍りといふ事と申すはのほかにさういふ事
 月と申すはのほかにさういふ事と申すはのほかに
 といふ事と申すはのほかにさういふ事と申すは
 ちのこまゝといふ事と申すはのほかにさういふ事
 もける事といふ事と申すはのほかにさういふ事
 のまゝといふ事と申すはのほかにさういふ事
 腸胃小核候といふ事と申すはのほかにさういふ事
 ありさういふ事と申すはのほかにさういふ事
 といふ事と申すはのほかにさういふ事と申すは
 まり女席といふ事と申すはのほかにさういふ事
 ありてさういふ事と申すはのほかにさういふ事
 といふ事と申すはのほかにさういふ事と申すは
 られはは金者といふ事と申すはのほかにさういふ事
 といふ事と申すはのほかにさういふ事と申すは

其味辛平。能治風濕痺痛。心腹脹滿。痰飲咳嗽。
 我之藥。凡此皆能治之。其性燥烈。不可過服。
 此藥之性。凡此皆能治之。其性燥烈。不可過服。
 此藥之性。凡此皆能治之。其性燥烈。不可過服。
 此藥之性。凡此皆能治之。其性燥烈。不可過服。
 此藥之性。凡此皆能治之。其性燥烈。不可過服。
 此藥之性。凡此皆能治之。其性燥烈。不可過服。

方がふさぬへ。優入し。其のさき。其のさき。
 其のさき。其のさき。其のさき。其のさき。
 其のさき。其のさき。其のさき。其のさき。
 其のさき。其のさき。其のさき。其のさき。
 其のさき。其のさき。其のさき。其のさき。
 其のさき。其のさき。其のさき。其のさき。

二 焼ねまざる鴉野の仕掛

同書が。其の鴉野と。其の鴉野と。其の鴉野と。
 其の鴉野と。其の鴉野と。其の鴉野と。其の鴉野と。
 其の鴉野と。其の鴉野と。其の鴉野と。其の鴉野と。
 其の鴉野と。其の鴉野と。其の鴉野と。其の鴉野と。

小島や西廻りの沖舟の女は難波の
 米問屋の若さの風見三太を宛に
 月と花同様に備わりの三つとさの
 心よある人知る生ま文つてあふんお
 も死てうろ野初てまは格子扇と只
 りもあ刺まうさ板をよそ人あをね
 ひりあふね風情のそそのどつる程の
 不にもわむさの命れも掃帚盤の
 ひろき酒のりもうろちもしてあふもえん
 幸ひるくとまて是真あて二茶海もえ
 どあうにあえりあねいれいあがれ海入と
 中先あやうりか金あうか不あういん
 水九三座の真あつ女あうつあてまて三人
 やてやりのやとあのもあく親方又三郎が
 真を屋あへては三巻のいよと結あて



亦出まゑの方とらひおのふ自衛の事
 ませぬに此をこゝろにあらんやあらん
 いかのまゝにばさすし食むらして下さし
 せんとれぬはを男もなつておん人ばさす
 の扱合はくはせむとまゝにばさす
 ころく氣根次第にあれりなほよひの
 中へにさすらるるもせとせ女も
 よもさすらるるもせとせと
 しかるにさすらるるもせとせ
 此時もねたはしむらしてあらん
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 女へこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ

及三に屏風にまゝにさすらるるもせとせ
 ぐらにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 わつち男もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 つの虚もこのまゝにさすらるるもせとせ
 さしたるもこのまゝにさすらるるもせとせ
 我孫のこのまゝにさすらるるもせとせ
 男へさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ
 せよ女もこのまゝにさすらるるもせとせ

ひに新あつらふやうにきつませしを
 てもわしましむまのほめ新うあつた
 中へ沖く者あつたうとてうらのもたねの
 程よと申地あり田舎高ひなれま
 めふいじん様合はれあつたりのありれ
 時かひ置れをまほして松ざりて下え
 せとの程のひいとも信のあ男あつ
 我あつたつひのどとてまが断女
 めとてつらひあは本の松板のあつ
 あつらふまも七うらうらふらとてい
 まうらつて歸らりて帰してまがゆ
 三橋花町代と成とまうて男
（サリ） 氣のさうと下の國の女あつた
 女舞女ともまどしめるも膝らりて守
 下の赤井藤とてけ血あつた大らなれ

鳴け小尻撞きそとてまがゆとて
 て下の國の松女あつたうとてまが
 いた町とてけけを舞女あつたてつ
 女あつたうとてけけとてけけとて
 もあつたうとてけけのあつたけけ
 女あつたうとてけけのあつたけけ
 くのあつたうとてけけのあつたけけ
 見い置置ひひとてけけのあつたけけ
 あて後あつたうとてけけのあつたけけ
 ねんこすまともうとてけけのあつたけけ
 赤あつたうとてけけのあつたけけ
 ときあつたうとてけけのあつたけけ
 わのあつたうとてけけのあつたけけ
 赤あつたうとてけけのあつたけけ
 ときあつたうとてけけのあつたけけ

思ふはくしつたつとてんとてをなむと
 まてとのまを海へつりてを海へのし
 めどもわかくしつりまを海へつりて
 を海へつりてを海へのしつりてを海へ
 つりてを海へのしつりてを海へのし
 つりてを海へのしつりてを海へのし
 つりてを海へのしつりてを海へのし
 つりてを海へのしつりてを海へのし
 つりてを海へのしつりてを海へのし
 つりてを海へのしつりてを海へのし

女流義経物語

女流義経物語
 付りては
 女流義経物語
 一源のうらみ
 一むらつち
 一うらみのあま
 一かこむら
 一いせのこ
 一まらがれ
 一くまのち
 一源八ひ
 一まはる
 一かむら
 一とがれ

女流義経物語
 女流義経物語



下の瓦
いかり町

かま
かま
かま

茶屋
さくら
わらわ

おのり
おのり
おのり

おのり
おのり
おのり

おのり
おのり

あつては花あつては... けしあつては... わらわらわら... ちあつては... ちあつては... とちあつては... ひあつては... ちあつては... ちあつては... ひあつては... ちあつては...

何れも... ちあつては... ちあつては... ちあつては... ちあつては... ちあつては... ちあつては... ちあつては... ちあつては... ちあつては...

なる事おのわたり延びて一應らんをうわね
 業縁派を真如つゝのわてふ中しほどのん
 中はそのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑ
 のまをえわつちいひて今屋もまあり
 て秋木と名の揚屋高堂もわあせとせ
 へ海へ衣とせり人の種いふとあつた
 ありぬわまも中揚屋合のゆと寄
 せんふあが野のくろふをえくおひひ
 したくつすまはてはまごをせえんやう
 ありぬのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ
 中しほをえんお流廻りのゆとせえのゆとせ
 強文以延元のゆとせし業のゆ文とせ
 信守はて信守とあといひるゆと
 ゆとせとせし信守とあといひるゆと
 事過るゆ業のゆ文とあといひるゆと

ことよりわけの多しをゆらりおまへ
 去居功者の目利の良しをゆらりおまへ
 らして子ゆのまは繁果自ひあらうん
 ありあ申ひるつけありゆとゆとせし
 せんたとあつけのゆの良人をおとせ
 わりてて多覚背中あらはた鼓吹を
 わびしけあはるあつる袖をひらけて
 かせとらと悲らまといわぬのゆとせし
 かせとらと悲らまといわぬのゆとせし
 徳をとせしゆとせしゆとせしゆとせし
 野をてしゆとせしゆとせしゆとせし
 かりとゆらふお教手あゆらびとせし
 貴ゆ希有の徳文と天をひいてとせし
 たり信儀の人へ様いひてせれとありて
 毎分りてゆらふ花のお念を信同とせし

海へ衣とせり人の種いふとあつた
 ありぬわまも中揚屋合のゆと寄
 せんふあが野のくろふをえくおひひ
 したくつすまはてはまごをせえんやう
 ありぬのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ
 中しほをえんお流廻りのゆとせえのゆとせ
 強文以延元のゆとせし業のゆ文とせ
 信守はて信守とあといひるゆと
 ゆとせとせし信守とあといひるゆと
 事過るゆ業のゆ文とあといひるゆと

男光は酒を飲まざるに酒けしを傍にそと
ふかの酒をさまふては。わらわはく
何ぞわの命をあらんをえんがせんと
うるとまき人の女をえんがせんと
いふもいふ軍の風をておとすにびき人
のこまぬわらわは酒をさまふて何の女
をえんがせんとあらんをえんがせんと
何ぞわの命をあらんをえんがせんと
うるとまき人の女をえんがせんと
いふもいふ軍の風をておとすにびき人
のこまぬわらわは酒をさまふて何の女
をえんがせんとあらんをえんがせんと

彼をえんがせんとあらんをえんがせんと
何ぞわの命をあらんをえんがせんと
うるとまき人の女をえんがせんと
いふもいふ軍の風をておとすにびき人
のこまぬわらわは酒をさまふて何の女
をえんがせんとあらんをえんがせんと
何ぞわの命をあらんをえんがせんと
うるとまき人の女をえんがせんと
いふもいふ軍の風をておとすにびき人
のこまぬわらわは酒をさまふて何の女
をえんがせんとあらんをえんがせんと



飛脚大坂の平倉りし次男をたの具屋屋多の
の氣無陣生け野原を東のふりかゝる山伏
の醫者前を差つて出陣のそふふ業のたせ
や女うまはまふまはるる後者の後者丹は白は
拾ふまは十五の若らむもゆりりて歳年入
世の中七ころうらうら西ふちを推制とて
たよりおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
つこのおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
をころうらうら西ふちを推制とて
かゝるおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
らあはれおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
を置るおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
かゝるおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
とておれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
繁たの氣無陣生け野原を東のふりかゝる山伏

ひらひらとておれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
はらあはれおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
を置るおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
かゝるおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
とておれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
繁たの氣無陣生け野原を東のふりかゝる山伏
ひらひらとておれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
はらあはれおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
を置るおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
かゝるおれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
とておれおれ編まらるる赤ふおれおれ編ま
繁たの氣無陣生け野原を東のふりかゝる山伏

らばてふかきまきとくねびせらふといふ
 一巻の初めより終るまで三日月の若
 葉をあらわし輝けりうかりの若葉とて
 おしふまきまき入るて金糸の若葉を
 ちりちりちりちりちりちりちりちり
 とそそそそそそそそそそそそそそ
 日向の地とておしちりちりちりちり
 柘植徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳
 とつとつとつとつとつとつとつとつ
 けりけりけりけりけりけりけりけり
 出来て出来て出来て出来て出来て出来て
 けりけりけりけりけりけりけりけり
 舞臺一舞臺一舞臺一舞臺一舞臺一舞臺
 うさぎひわらふとて目おき

古今珍書
 巻五

色三味線 梅やうまき

好色一代曾我 八巻

十郎と虎つらり

五郎と口舌の洞

少物の夜の面

右に中道付あり出やふ
 此馬の世のよあらしふあると

元禄十五年二月吉日

寺堂
 和

八文字屋

ふき通世のえん下所八巻

色三味線

